

## 濱一衛の見た一九三〇年代中国芸能：北平・天津

中里見，敬  
九州大学言語文化研究院：准教授：中国文学

<https://hdl.handle.net/2324/1515745>

---

出版情報：九州中国学会報. 53, pp.59-73, 2015-05. 九州中国学会  
バージョン：  
権利関係：図1~14 Courtesy：九州大学附属図書館



# 濱一衛の見た一九三〇年代中国芸能——北平・天津——

中里見 敬

はじめに

濱一衛（一九〇九～一九八四）が一九三四年五月から一九三六年六月までの北平留学中に観た中国演劇の記録は、演劇研究にとって一次資料としての価値を有するものである。別稿で濱の京劇に関する著作を検討したのに引き続き、本稿では北平・天津における京劇以外の劇種（曲芸を含む）についての上演記録を取り上げて考察したい。

## 一 北平

### 一・一 北方崑曲

一九三〇年代の北平では、京劇の隆盛に対して、崑曲はすっかり凋落していた。濱は次のように記す。

崑曲は愈々絶滅に落入らんとして居る。古文學、戲曲に興味ある人間以外には、相當な人々でも崑曲はわからないからつまらない、と背をそむけてゐる。やゝ土臭い韓世昌、其他の崑曲でも、僕等は皮簧の數々に比べて、恍惚とする割合が遙かに多かつた。そのかみ、崑曲が上下一般にもてはやされた時代の素晴しさは、如何ばかりかと感傷にふけるのみ。（中丸均卿・濱一衛『北平的中国戲』東京…秋豊園、一九三六、九四頁）

北方崑曲は、韓世昌の栄慶社が細々と公演を続けていた。濱は一九三六年四月三日哈爾飛戲院で韓世昌による「春香鬧学」「遊園驚夢」を見ており、その戯単が九州大学附属図書館濱文庫に残されている(図1、浜文庫/集181/47)。

**韓世昌** 小軀で、胴の長い東洋人の典型的體格、大目玉の下は黠く、絞肌の化粧は荒れ果て、之でよくも女形をと思はせる彼が、一度舞臺に上つて、例へば「遊園驚夢」の世界に入つて來て、「春香」と侍女に呼びかけると、あの春の光の様に麗かな笛の音の中に美事に透け込んで、舞臺一杯に妖しい香氣が立ち罩める。夢の中をさまよふ、うら若い乙女。笛に合はせて唱ひつゝ、舞ひ遊ぶ。歌と幽艶な身振りの相聯から流れ出す一瞬の現實と幻の混交。北平でお能の一面に接しやうとは! (『北平的

中国戯』八九〇九一頁)

前年の一九三五年七月二日(図2、浜文庫/集181/56)と同日(図3、浜文庫/集181/95)には立て続けに侯永奎と李万春がそれぞれ演じる「武松打虎」を見て、次のように記している。

**侯永奎** 尚和玉にも比したい美しい型、強々と湧えた喉、彼の演ずる武生は素晴らしい。／南方の人氣者の李萬春の崑曲「武松打虎」と、彼の夫を偶然續けて見たが、丁寧さ、古雅な美しさ、に於て遙かに李の上に、昔語りの世界を樂しませて呉れた。之に比べると李萬春は單なる輕業師に過ぎない。(『北平的中国戯』九三〇九四頁。引用に際し、改行



図2 1935年7月2日北平哈爾飛戲院  
九州大学附属図書館濱文庫所蔵  
(浜文庫/集181/56) 21.3×28.0cm



図1 1936年4月3日北平哈爾飛戲院  
九州大学附属図書館濱文庫所蔵  
(浜文庫/集181/47) 21.5×27.4cm

は「Z」とした。以下同じ。）

京劇を論じた別稿でも指摘したように、濱一衛は上海を中心に活躍する俳優よりも、北平の俳優の演技を好んだようで、上海の人氣京劇俳優李万春よりも、北平の崑劇俳優侯永奎が演じる武松の方を高く買っている。見巧者の濱の評は信頼に足るものと考えてよい。ところが、戲単に記された票価は、李万春の七月十日が最高級の包廂で三・五元、池座で七角なのに対して、七月二日は包廂が二・五元、池座が五角となっている（ともに白天戲）。つまり、李万春の人氣により彼の公演の方が、侯永奎および大軸で韓世昌が「尼姑思凡」を演じた崑劇よりもチケットが高いのである。

当時の票価は出演する俳優によって大きく異なった。同じ哈爾飛戲院の戲

単で見ると、一九三五年六月五日白天の楊小樓・郝寿臣「百騎劫魏宮」は最高級の包廂で五元（浜文庫／集181／88）、一九三六年一月二十九日夜戲の筱翠花「貴妃醉酒」は六元（浜文庫／集181／91）、一九三五年七月十三日白天の馬連良「借東風」六・五元（浜文庫／集181／86）などといった具合である。さらに各一座の座頭級が一堂に会する義務戲ではチケットは高騰し、一九三五年十月五日第一舞台の義務戲は、包廂が六十元から十六元、池座で六元から三元、最も安い三階散座の後排でも一元である（浜文庫／集181／42）。

濱文庫には一九三五年七月十五日の韓世昌「獅吼記」（浜文庫／集181／57）、一九三五年七月二十一日の韓世昌・白雲生「西廂記」、侯永奎・馬祥麟「霸王別姬」（浜文庫／集181／56）といった崑曲専門の榮慶社の戲単に加えて、京劇と崑曲を合演した一九三五年八月十二日中和戲院の程硯秋・俞振飛「琴挑」（図4、浜文庫／集181／83）の戲単も残されている。

| 春   |     | 夜   |     |
|-----|-----|-----|-----|
| 李萬春 | 萬玉琴 | 蘇連漢 | 趙金聲 |
| 毛慶雲 | 小雲官 | 陳富瑞 | 范富喜 |
| 張長水 | 李春德 | 于雲朋 | 黃一  |
| 高麗雲 | 王福德 | 陳富瑞 | 失街亭 |
| 松   |     |     |     |

図3 1935年7月2日北平哈爾飛戲院  
九州大学附属図書館濱文庫所蔵  
(浜文庫/集181/95) 21.3×28.0cm

**俞振飛** 南方の崑曲家出、専ら程硯秋の相手役を承はり、さわやかな藝風、上記先輩等に缺けた姿體美、若々しさ、そして一沫の遊蕩的な苦みをおびた顔付、皮簧よりも崑曲系統のものになると出がだけに程硯秋を壓する腕前。崑曲「琴挑」に於ける彼は理想的な女蕩しの美を描き出して、見る人を恍惚とさせる。(『北平的中国戯』八一―八二頁)

濱の留学期間中に、韓世昌と侯永奎の対立により、榮慶社が分裂してしまふ。滅亡の危機に瀕していた北方崑曲の分裂を述べる濱の筆致からは諦観さえ感じられる。

民國二十五年四月十五日の北京哈爾飛戲院の夜戯を最後に侯永奎、馬祥麟の新鋭と韓世昌、白雲生との間に内紛を生じ、辛うじて軌道に乗りかけて来たこの一座も分裂の止むなきに至つた。白雲生が脱退を決意し、

韓世昌を道連れにしたらしいが、韓白は「戲班の離合は常ですよ」といつてはゐても多年兩人が培つた榮慶社のことだ、多少の感慨はあつたであらう(分離の原因は戲劇旬刊第二十期に詳しい)。彼等の舞臺生活はそれは無慘なものであつた。それまた滅亡の關頭に立つた崑曲を少しでも引き戻さうとの熱情からそれを忍んでゐた。時には僅か數十人の看客を擁して、物寂しさうにそれでも力をこめて唱ふ、佳人才子劇は、餘りにもみじめであつた。古びた衣裳や端役の深い顔の皺を眼のあたり眺めては、一寸さうした劇の世界には、とけ込み切れぬものがあつた。そのまゝにして置いても數年ならずして、滅びてしまふであらうことは解つてゐたのに、それに更に拍車をかけたのが今度の分裂であつた。(濱一衛「最近に於ける北崑の変遷」『支那学』第十卷第三号、一九四一、九二頁)

|                                                           |  |
|-----------------------------------------------------------|--|
| <p>中和大戲院</p> <p>十八日</p> <p>第一場</p> <p>第二場</p>             |  |
| <p>秋原</p> <p>侯永奎 王少奎 李多</p> <p>瑞麟 王少奎 李多</p> <p>博珠英女兒</p> |  |
| <p>周安 瑞麟 王少奎 李多</p> <p>博珠英女兒</p>                          |  |
| <p>角一位每</p>                                               |  |

●印代社圖書告廣民共機特設門平相●

図4 1935年8月12日北平中和戲院  
九州大学附属図書館漢文庫所蔵  
(浜文庫/集181/82) 18.8×27.3cm

濱は崑曲と皮簧すなわち京劇の違いを、次のように端的に述べたうえで、かりに崑曲を保護したとしても効果はないと見ている。こうした見方の背後には、演劇は観客が享受することによって成立するという濱の確固とした演劇観を窺うことができる。

其の昔の崑曲盛なりし頃が今に復活したとしても、今日の看客には劇本を持たねば解り難い劇詞に困るし、最も當にする唱にしてからが、百人が一曲を唱つても、一轍に出づるが如く、全く同一である可きものであつてみれば、口法、唱法に上手下手の別を見出し得ても、皮黄の自由なる工夫獨創を現せるに比べて、餘りにも魅力に乏しい。(中略)梨園公會邊りをして皮黄班に強制的に、たとへ前場でもよいから入れて貰ひ、民衆の崑曲への興味を呼び起こして其の復興を圖るとか、國家の力によつて之を保存するとかいつてゐる人もある。それを許す皮黄班もあるまいし、よし許しても、崑曲への興味が起る筈もあるまい。國家の力といつても其の要素は殆んど皮黄の中に採り入れられてゐることだから、それ程にする必要もあるまい。よしそうして残つても恐らくはみじめな存在にしかならないであらう。(『最近に於ける北崑の変遷』九八―一〇〇頁)

このような濱の冷徹な見方は、雅なる崑曲に無上の価値を認めた青木正児のある種ロマンティストぶりとは好対照のように思われる。青木の以下の文章でいう花部とは皮簧(京劇)、梆子腔、乱彈などを指し、雅部は崑曲を指す。

花部は色を重んじ、雅部は藝を貴ぶ。孰か高くして孰か卑き、是れ余が言を俟たずして論自ら定まる所あるべし。然りと雖も黄鐘毀たれて瓦釜雷鳴す、陽春白雪は遂に下里巴人の俚耳に入り易きに及ばざるは世の常なり。南方の秀よく西蜀北燕の俊と抗して孤軍奮闘せしが、南風競はず、大勢の赴く所之を如何とも爲す能はず。(中略)たゞ聊か人意を強うするに足る者は、崑曲の根據地たる蘇州には集秀部の嚴然として存する有り、名聲南北に轟けりき。(中略)大雅未だ全く地を拂はず、以て君子の清賞に供するを得たるなる可し。(青木正児『支那近世戯曲史』京都…弘文堂書房、一九三〇、七一四―七一五頁。のち『青木正児全集』第三卷、東京…春秋社所収)

余は皮黄が人も無げなる横暴と、崑曲の衰れ無残なる末期とを見るに忍びざるなり。余往年姑蘇に遊び戲園を過つて呉伶が演ずる所を聴きしが、悉く是れ皮黄の調、工尺伊啞として聴を爲し難し。宛もかの亡國の子孫が得々然として口に侏離の敵國語を操り、嘗て其の父祖が無念の齒をくひしぱりつゝ、轅門に胃を脱ぎし事を知らざるが如し。（中略）吾人茲に至つて暗然たらざるを得ず、是れ余が其の亡き跡を弔はんと欲して此の篇を草したる所以なり。（青木正児「崑曲より皮黄調への推移」、羽田亨編『内藤博士還暦祝賀支那学論叢』京都・弘文堂書房、一九二六、八一七～八一八頁）

青木正児と比較することにより、濱の文章が主観的な感情を排し、あくまでも事実に基づき淡々とした記述に徹していることがいっそうよく理解できよう。

上に引いた濱一衛の処女論文「最近に於ける北崑の変遷」（一九四二）は、青木正児の「崑曲より皮黄調への推移」を受け継ぐとともに、一つの劇種の沿革をたどつて現在にまで至る上演史研究の嚆矢ともなった。以後、濱は中国各劇種の変遷を、上演記録に基づき記述するという研究スタイルを確立し、青木正児『支那近世戯曲史』の下限から現代に至る演劇上演史を立て続けに数編発表していくのである。

## 一・二 直隸梆子（河北梆子、秦腔）

濱一衛が翌一九四二年に発表した論文「北京に於ける梆子腔について」は次のように始まる。

梆子腔といふのは使用する樂器から來た名であり、秦腔というのは發生した地名から來た名である。（中略）梆子はこれより光緒二十年代の盛行を経て、民國に至れば早くも衰へきつてゐた。全く花火線香のやうな劇曲で、支那の演劇史にその例を見ない。（濱一衛「北京に於ける梆子腔について」『支那学』第十卷第四号、一九四二、一二九頁）

梆子腔の特徴は次のようなものであった。

「呼呼」という胡弓と、「梆子」という拍子木を、ひきまくり打ちまくりながら唱う梆子腔は、伴奏は騒がしく、唱は刺激の強いもので、静かな笛の伴奏、柔らかない唱い振りの崑曲とはおよそ正反対である。崑曲が静かなふしで佳人才子の物語を唱うのに、梆子は悲痛なふしで忠孝節義の物語を演じる。（濱一衛著訳、中里見敬整理『中国の戯劇・京劇選・濱一衛著訳集』福岡・花書院、二〇一一、九―一〇頁）

北京における梆子腔の流行が短かった理由について、濱は次のように述べている。

梆子が光緒初年百花の一時に芳を吐いたが如くに北京の人士を瞠若たらしめた所以は、彼等の技藝がその時既に圓熟の境に達してゐたからであつた。（中略）梆子の盛行は開花から脱落まで全く同一の手によつてなされたといつてもよい。技藝の優れた人が續出したためもともと北京に地盤を占めてゐたものが急に認められ、それらの人々が逝けば又流行らなくなつた。山西系の名優が衰退しても後續の者に乏しく、最も俗な天津梆子が進出し、梆子特有の亢爽さ精悍さがなくなり、かくては皮黃の如く委婉たる花腔を追ふやうになり、梆子の本色が失はれて來たのであつた。而も忘れてはならないことは光緒末年から流行り出した女優劇は忽んど天津梆子であつたといふことである。女優劇については今は觸れないが、徒に色藝に頼る彼女達の梆子の歪んだ發展が却つて正しい梆子の成長を阻害したのもあつた。／かうして今日北京の大劇場では梆子は聴けないが時々山西人の要望に應じ、山西梆子と銘打つて來演し、昔ながらの演出で通し狂言を演じてゐる外、天橋の歌舞臺、といった小芝居で皮黃と合演して、生残りの梆子班の人々が聲を絞つて斷末魔の叫びを揚げてゐるのみである。（北京に於ける梆子腔について」一四七―一四八頁）

濱が留学中に北平で見たのは、「まだ民国二十四、五年には北京には地付きの梆子班もあつたが、いつの間にか北京から姿を消してしまつた」（『中国の戯劇・京劇選』一〇頁）という最末期の直隸梆子であつた。『北平的中国戯』の俳

優評には、二人の梆子戲の女優が取り上げられている。

直隸梆子（秦腔）に女優金鋼鑽と小香水が張りさける様な喉を聞かせて居る。以前は小香水の方が有名だったらしいが、今は衰へて、金鋼鑽の百貫目も有り相な貫祿には敵はないらしい。僕は直隸梆子を聞くと頭が痛くなる程辛く、悲壯激越趣味にはカブトをぬぐ、その調子と云ひ、内容と云ひ、ナニワブシ、詩吟、サツマ琵琶フアン並びに、國民精神文化研究員におすゝめするに最適當かと存ずる。只、唱つて居る途中で急に伴奏の胡弓と笛が止んで、唱のみ残る形式が仲々良い。田舎のニンニク臭い婆ア共を中心とする見物は仲々捨てがたいおもしろみを持つて居る。（『北平的中国戲』九六〜九七頁）

濱文庫にはこの二人の出演した一九三五年八月七日哈爾飛戲院の戲單が現存している（図5、濱文庫／集181／89）。この日は兩人が大軸で「新三娘教子」を演じている。それ以外の演目は、粉牡丹の「貴妃醉酒」、遲金声の「伐齊東」、駱連翔の「八大錘」など、俳優から見て皮簧（京劇）であったようだ。ちなみに票価は、最高級の包厢が二・四元、池座が五角で、崑劇と同等かやや安く、梆子戲の庶民性が表れている。濱文庫には梆子戲の戲單として、一九三一年八月二十四日第一舞台の金鋼鑽「天河配」（図6、濱文庫／集161／45<sup>3</sup>）、同二十五日第一舞台の金鋼鑽「大佛昇殿」（図7、濱文庫／未整理）、一九三四年四月六日広徳戲院の五月仙・十四紅「烈女伝」、三児生（孟珍卿）・筱桂桃の「大蝴蝶杯」（図8、濱文庫／集81／50）が所蔵されているが、濱の留学期より早く、実際に觀劇したかどうかは確認できない。一九三四年十一月五日慶楽戲院の李桂雲「一念差」、筱蘭芬「捉放曹」（図9、濱文庫／集181／112）、および一九三五年四月二十九日吉祥大戲院の鮮靈芝・胡菊琴「孟姜女」（図10、濱文庫／集181／99）は濱の留学期間中である。なお、九州大学附属図書館濱文庫には、濱が当時収集した直隸梆子の唱本が多数所蔵されている<sup>4</sup>。



圖6 1931年8月24日北平第一舞台  
九州大学附属図書館演文庫所蔵  
(浜文庫/集161/45) 22.9×32.3cm



圖5 1935年8月7日北平哈爾飛戲院  
九州大学附属図書館演文庫所蔵  
(浜文庫/集181/89) 21.5×28.0cm

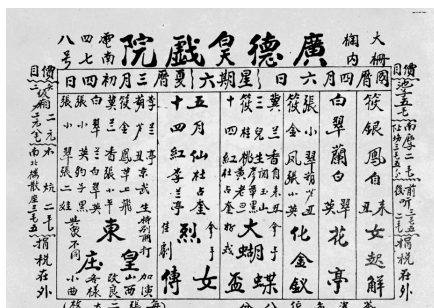


圖8 1934年4月6日北平廣德戲院  
九州大学附属図書館演文庫所蔵  
(浜文庫/集181/50) 18.9×27.5cm

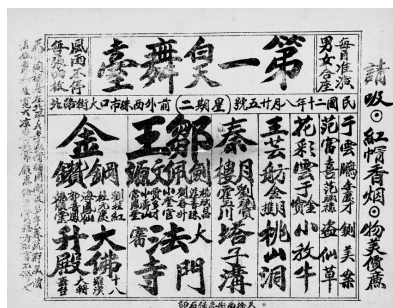


圖7 1931年8月25日北平第一舞台  
九州大学附属図書館演文庫所蔵  
(浜文庫/未整理) 22.7×30.6cm



圖10 1935年4月29日北平吉祥大戲院  
九州大学附属図書館演文庫所蔵  
(浜文庫/集181/99) 22.0×27.7cm



圖9 1934年11月5日北平慶樂戲院  
九州大学附属図書館演文庫所蔵  
(浜文庫/集181/112) 22.9×30.0cm

### 一・三 評劇（蹦蹦戲、唐山落子）

濱の留学中、評劇が北平に勢力を増し始めていた。

京劇が脚本は高級化し、入場料は高くなり、段もののばかりを上演して全本戲（通し狂言）を上演しなくなって大衆から離れようとしていた時に、評劇の通俗的な姿は一般大衆の魅力で、評劇の進出すべき道もここにあった。現実生活の中の言葉がそのままに唱われている。これは大きい魅力である。喜彩蓮は梆子や京劇の脚本を改編したり、歐陽予倩の戯曲を上演したり、演技の低俗な面を避けて従来の観客の上に新しい観客層の獲得に相当の効果を収めた。／この喜彩蓮の出現は民国二十五年（一九三六）前後であるが、民国二十八年十ヶ月間の喜彩蓮の出演度数は昼夜を合わせると五百十四回に上り、出演劇場も北京各方面にわたった。（中略）こうして喜彩蓮の活躍は京劇の最大の敵国を形成し、京劇が崑曲の地位についた時の後継者たり得るかも知れないとさえ思えるようになった。（『中国の戯劇・京劇選』一一頁）

濱が一九四二年に発表した論文「平戲考」は、評劇の急速な発展を論じてタイムリーなものであった。

「杜十娘」、「獨占花魁」、「珍珠衫」は既に平戲の古典となり、最も大衆に歓迎はされたが、俚俗な詞句、淫猥な演技は一段高い聴衆の脾胃には合はない。このまゝで進めば一流の劇曲には如何にしてもなり得ない。（中略）脚本の改善と並んで演技も適度に高尚化すれば、その前途は洋々たるものがある譯である。（中略）平戲といへば劇詞は低劣であり、演技は淫蕩であつて、多くの腔調の中で下下の下に屬するもの、藝術ではないといふのが一般の考へである。白玉霜はその淫猥な演技の爲め時の市長袁良によつて北京を追はれたのは民國二十四年であつた（この直後上海に現れ大いに人氣を博した）。彼女達は大向に迎合するの餘り演技はひたすら低級になるのみであつた。崑曲「連環計」の「只君あり主あるを知るのみ」（三國演義）という貂蟬は平戲では三等歌妓の如きものになり終つてゐた。この儘では平戲の前途は知れたものであつたであらう。／喜彩蓮の出現がこの惡傾向を制禦して

くれた。劇情の平易、劇詞の平易、入場料の低廉、全本戲の上演等、この通俗性は一般大衆には確に大きな魅力である。卑俗のそしりを受けつづけた皮黄も平戲に比ぶれば可成り高級なものとなつてある今日、平戲の進出すべき道も見出される。喜彩蓮は脚本では歐陽予倩の編になるといふ曲を上演したり、梆子、皮黄の改編を續々行ひ、演技では從來の目を掩ひたくなる方面を努めて避け、從來の看客を離さず新しい看客層の獲得を目論み相當の効果を収めてゐる。(中略)民國二十八年十箇月間の喜彩蓮の出演度数は晝夜を合すると五百十四回に上り、根城の華北を除いて、吉祥、新新、長安、廣和、廣德、慶樂等、城の内外の一流劇場に出演してゐるし、二十九年度的の上座統計によると、喜彩蓮の一座は出演回数が多いにしても第二位を占めてゐる。昨年九月新新で白玉霜、喜彩蓮の「和睦家庭」が上演されたとき、前排が一元五角であつたことによつて看客層の向上も想像できる。(濱一衛「平戲考」『松山高商論集』第四号、一九四二、一四三―一四六頁。「」を付加し、句読点を一部改めた。)

かつて卑俗であつた京劇が徐々に高級化していったことを引き合ひにして、今後の評劇に発展の可能性を認めている。また妖艶な演技で人気を博した白玉霜よりも喜彩蓮を高く評価するあたりに濱の見識がうかがわれる。濱文庫所蔵の戲單のうち、一九三四年十一月十五日三慶戲院の李銀順「左連城告状」、李小順「三賢博」(図11、浜文庫/集181/30)、および一九三五年五月三十一日奉天・共益舞台の白玉霜「全本珠簾寨」(図12、浜文庫/集181/35)は評劇の公演である。ちなみに後者は、一九三四年白玉霜が北京市長によつて追放され、上海公演を始める一九三五年八月までの間、奉天で京劇と評劇の合演、いわゆる「両下鍋」形式で舞台に立っていたことを証する戲單である。<sup>5)</sup>

なお、濱は一九三九年七月から八月にかけて北平を再訪しており、評劇の上

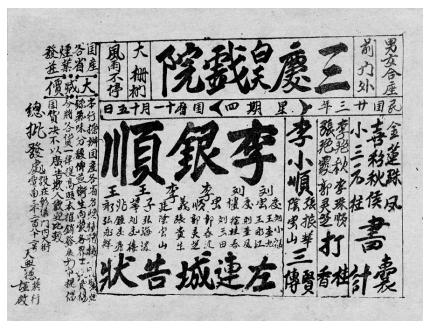


図11 1934年11月15日北平三慶戲院  
九州大学附属図書館濱文庫所蔵  
(浜文庫/集181/30) 20.1×27.1cm

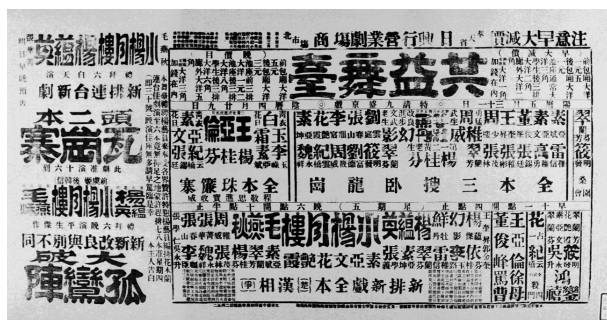


図12 1935年5月31日奉天共益舞台  
九州大学附属図書館演文庫所蔵（浜文庫/集181/35）30.0×55.8cm

演状況を確認したうえで、この論文「平戯考」を執筆しようとしたのかもしれない。

#### 一・四 奎徳社の時裝新戯

濱文庫所蔵の一九三六年四月十二日慶楽戲院の戲単（図13、浜文庫／集181／36）は縦長で、しかも女優の写真が掲載されており、一般の戲単とは明らかに異なる。これは坤伶つまり女優劇団・奎徳社による時裝新戯の戲単で、この日の演目は鮮蕊芳の「翠搔頭」であった。奎徳社は翌年解散するので、濱は最晩年の公演を見たことになる。

光緒二十七年、天津から招かれた女優劇団が、崇文門内米菴で搭棚でやつたのがそのはじめです。（中略）豫想に反して女優だけの一座でも人氣は衰へず、次から次へと女優劇団が生まれました。民國二年には雙慶班、和慶班、民國三年には鴻順社、慶和成社、民國四年には志徳社が起り、更に民國五年には田際雲の崇雅坤社が組織せられ、その七月十五日天樂園に初出演し、（中略）この民國四、五年頃が女優劇の全盛時代で、十三年頃から衰へ出しました。（中略）かうした全盛時代が數年にして終つてしまつたのは、彼女達の芝居が色を重んじて藝を重んじなかつたからでした。（濱一衛『支那芝居の話』東京・弘文堂書房、一九四四、七九〜八〇頁）

文中に出てくる志徳社のち奎徳社になり、柳子と皮簀の「両下鍋」で時裝新戯を上演した。先に柳子戲の項で触れた一九三四年十一月五日慶楽戲院の戲単（図9、浜文庫／集181／112）は奎徳社の公演で、李桂雲の演じた「一念差」

は楊韻譜演出の代表的な時装新戯である。一九三五年四月二十九日吉祥大戲院（図10、浜文庫／集181／99）の鮮靈芝も奎徳社の女優であり、この日の時装新戯は「新女兒経」であつた。前年に上海明星影片会社が制作した映画「女兒経」（胡蝶主演）を焼き直したのであらう。その戲單に「配製颱風、下雨、響雷、打閃、新穎奇妙彩砌、与衆不同」と記されているように、楊韻譜の演出は舞台の背景效果に意を用いたが、濱の好むところではなかつた。

二 天津 梅花大鼓、河南墜子

一九三六年二月二十九日、開封、洛陽等への旅行の途中で立ち寄った天津で、中原公司遊芸場という大型の演芸場に行っている。その様子は旅行記の中に記されている。

午前十一時五十分汽車は天津に着いた。総領事館で執照を受取つて、夜の汽車の時間までを中原公司の遊芸場で過した。三層の落子館、四層の評戲場電影、五層の大劇場と皆觀て二毛というから廉い。大阪の樂天地といつた所であろう。大劇場の良い場所は二毛の追加であるが、今は張淑蘭、楊博生であり、此の前は梁韻秋級を出演させているのであるから決して高くはない。天津の人の話では何時も此の様に満員だという。大劇場の皮簧は「玉堂春」を演つていて、しばらく覗いて觀たが別に変つた事も無いし、四樓の評戲も北平の評戲と全然變りが無いので、三樓の落子館を聴く事にした。／丁度花小紅の梅花大鼓の「黛玉帰天」から聴いた。二胡二丁と琵琶の伴



圖13 1936年4月12日北平慶樂戲院  
九州大学附属図書館演文庫所蔵  
(浜文庫/集181/53) 32.2×22.2cm

奏で例の通り賑やかなもの、合手毎に喝采を得ている。種々の大鼓の中で最も好きな梅花調であったので陶然として聞いているが、勿論北平の郭小霞にも及ばない。北平と変って居たのは河南墜子で、右手に拍板を左手に箸様の竹切れを持つのは同様だが、腰の低い台に乗せた黒塗りの大鼓が見当らない。勿論北平でも大鼓無しは墜子を聴いた事が無い訳では無いが、珍しいと思った。(濱一衛著、中里見敬整理「曲阜徐州開封洛陽西安旅行記」『言語文化論究』第二五号、二〇一〇、一九八〜一九七頁)

天津の大規模な演芸場を、大阪の楽天地にたとえている。当日の戲單(戲報)(図14、浜文庫/集181/未整理)によると、各階で様々な種類の芸能が演じられており、五階では大戯(京劇)「全部新玉堂春」が張淑嫻、楊博生を主役として演じられていた。濱はこの「玉堂春」と四階の評戲は勿々にして、三階の落子館で曲芸(語りもの、唱いもの)の一種である梅花大鼓と河南墜子を聴いている。花小紅による梅花大鼓は、「二胡二丁と琵琶の伴奏」で、片手に拍板、もう片方の手のバチで大鼓を敲きながら「黛玉帰天」(黛玉焚稿)の物語を唱い述べる説唱文芸である。花小紅という名前から、花派の梅花大鼓であったことがわかる。金万昌を創始者とする金派は男が唱うのに対して、弦師であった盧成科が天津で女芸人に仕込んだのを盧派または花派という<sup>7)</sup>。河南墜子は墜子弦の伴奏で、鞏玉榮が拍板で拍子をとりにながら唱ったのであろう。矮脚書鼓と呼ばれる「腰の低い台に乗せた黒塗りの大鼓」が使われていないことが珍しがっている。

中原公司遊藝場日刊

五樓 大戲 晚場 十二點半

四樓 大戲 晚場 九點半

三樓 大戲 晚場 七點半

二樓 大戲 晚場 五點半

一樓 大戲 晚場 三點半

春堂 玉新部全

馬蘭 朱金 趙楊 張王 張玉 閻金

頭 拾 龍 部 全

周金 月新 小月 花月 白月 花月 白月 花月 白月 花月 白月

余于 郭朱 趙超 劉華 張張

片大偉 勞有 品出 司公蒙拉派

時深夜湘瀟

図14 1936年2月29日  
天津中原公司遊芸日刊  
九州大学附属図書館演文庫所蔵  
(浜文庫/未整理) 39.7×26.9cm

濱一衛はさらに河南省開封および江蘇省呉興での観劇記録も残しており、それらは稿を改めて論じることとしたい。

# 注

- (1) 拙稿「濱一衛の見た一九三〇年代中国演劇…京劇」(『中国文学論集』四三、二〇一四)
- (2) 他方、透徹した論考である青木正児「昆曲劇と韓世昌」(『青木正児全集』第七卷、一九七〇所収)も参照。
- (3) 拙稿「濱文庫に所蔵される南潯戲單の由来について—附・濱一衛著「劉氏の嘉業堂」(『九州大学附属図書館研究開発室年報』二〇一二/二〇一三)に掲出した「濱文庫所蔵戲單目録(第二版)」において、この戲單を一九三六年八月二十四日としたのは誤りである。一九三一年および一九三六年の陽曆八月二十四日はともに月曜日であり、戲單上の「國歴八月廿四號(星期一)」という記載からは何年か特定できないが、戲單の様式および出演者が一致することから図6、7の戲單は連続する二日間の戲單であることが確実であり、後者に「民国二十年」とあることから、一九三一年のものだとわかる。
- (4) 中里見敬・山根泰志・戚世雋「濱文庫所蔵唱本目録稿(四)」(『言語科学』第四七号、二〇一二)に著録した第九帙の木刻本三十八冊をはじめ、第十三帙以降の鉛活字本にも梆子戲の唱本が含まれている。
- (5) この奉天戲單の劇種については、神戸学院大学の森平崇文先生よりご教示いただいた。評劇の上海における流行については、森平崇文「上海における評劇(一九三五—一九三七)」(『第二回日中伝統芸能研究交流会報告書 都市メディアの空間と伝統芸能』大阪市立大学文学研究科都市文化研究センター、二〇一二)参照。
- (6) 濱の北平再訪については、拙稿「濱文庫所蔵戲單編年目録」(『中国文学論集』第三七号、二〇〇八)参照。
- (7) 倪鍾之『中国曲芸史』(瀋陽:春風文芸出版社、一九九一)四六三〜四六四頁、薛宝琨・鮑震培『中華文化通志・芸文典・曲芸雜技志』(上海:上海人民出版社、一九九八)二二九頁、および『中国曲芸志・北京卷』(北京:中国ISBN中心、一九九九)七一〜七二、一六六頁参照。中原公司については、『中国戲曲志・天津卷』(北京:文化芸術出版社、一九九〇)二六一頁参照。

※図版の掲載にあたり、九州大学附属図書館よりご厚意を賜った。記して謝意を表したい。

※本稿は日本芸術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)「濱文庫所蔵唱本目録の作成」(二〇一一〜二〇一五年度、課題番号:23520437)による成果の一部である。